

## 会 議 録

会議名	平成25年度第1回 八王子市市史編集委員会	
日 時	平成26年1月27日（月）午後6時30分～午後7時20分	
場 所	生涯学習センター第5学習室	
出席者氏名	委員	藤田 覚委員長、新井勝紘副委員長、相原悦夫委員、畔上能力委員、池上裕子委員、関 和彦委員、前田成東委員
	説明者	齋藤和仁市史編さん室主幹、長谷部晃一市史編さん室主査
	事務局	穂坂敏明市史編さん室室長、齋藤和仁市史編さん室主幹、佐藤広市史編さん室専門管理官、長谷部晃一市史編さん室主査、齋藤義明市史編さん室主任、渡部恵一市史編さん室主任
欠席者氏名	小川直之委員、松尾正人委員、光石知恵子委員	
議 題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 『新八王子市史』通史編の暫定執筆要項（案）</li> <li>2. 平成25・26年度刊行予定について</li> <li>3. 『八王子市史研究』第5号について</li> <li>4. その他</li> </ol>	
公開・非公開の別	公開	
傍聴人の数	なし	
配付資料名	<p>議事次第</p> <p>資料1 『新八王子市史』通史編の暫定執筆要項（案）</p> <p>資料2 平成25・26年度刊行予定</p> <p>資料3 『八王子市史研究』第5号の概要について</p> <p>資料4 『八王子市史研究』第5号投稿論文等の募集</p>	

## 会議の内容

### 1. 開会

【藤田委員長】本年度1回目の編集委員会を開催する。

欠席は小川、松尾、光石の各委員。出席委員は7名で、会議は有効に成立している。この会議は公開が原則であり、傍聴の申し出があれば許可する。

本日の会議録の署名は、池上委員にお願いする。

### 2. 『新八王子市史』通史編について

【藤田委員長】議題1である。

【事務局】前回、通史編「原始・古代」が通史編の中で最初に執筆が始まるため、暫定（案）ではあるが執筆要項を示した。編集委員会で議論し決定した部分もあるが、一部保留になった部分、執筆を進める中で資料編と齟齬が出てきた部分などについて、再度議論いただきたい。

まず、資料1、1ページ目から。二の①のところで、括弧内、《学問的で、しかし、わかりやすいものを》という一言を加えている。これは前回の議論の中で、この執筆の考え方をわかりやすく言い換えた発言であったので、ここに加えた。

それと、執筆の方法、②の中で執筆の方法の二つ目。前回の執筆要項では、数ページに1カ所と曖昧な言い方だったが、原則として1ページに1カ所、あるいは見開きの中に1カ所はとの意見があり変更した。

2ページ目は、特に変更事項、協議事項等はない。

3ページ目、数と単位であるが、「和暦及び年月日、世紀や日数、年数などを表す二桁数字には「十」を使用し、三桁を超える場合は「十」を省略し、ゼロには「〇」を使用する」となっている。特に日数と年数に網かけをしているが、原始・古代編の執筆を進める中で、執筆者に単位の早見表を示したところ、年月日や年数が、市民が読みやすいようにするためにほかの数字と違う表記をするのはわかるが、年数は二の数量、年数というのをあらわしているのが数量、数の幅であって、数量と年数に違いをつける理由は何かとの意見があった。そこで、事務局で改めて資料編を確認したところ、3ページに「日数・年数などは時間や数量と同様にする」と書いてあるが、「15年前」は、資料編の中で既に「一五年前」という表記になっている。原始・古代部会からの指摘のとおり、資料編での書き方から前回提示したものに齟齬があったので、資料編に統一をしてよろしいかがまず一点。次に、世紀の表現について、既に資料編の中で、このアのほうの「十世紀」、「十一世紀」と十を使う表記を既に使っている。この二点について、まず数と単位の中で議論をお願いしたい。

【藤田委員長】はい。

前回、要項の提案があり、議論をしたが、1ページのところで執筆の考え方、《学問的で、

しかし、わかりやすいものを》を加えるということである。

【事務局】はい。

【藤田委員長】執筆の方法について、あくまで、1 ページに1 カ所は小見出しをつけるということ。これはよろしいか。

(はい)

【委員】1 ページのところの執筆の考え方で、委員長が指摘した学問的というところだが、学問的と書かれており、後に「やむを得ず専門用語を使う場合は」とあるが、普通、学問的にやると専門用語は全体的に使う。この専門用語は、一般の方が読んでわかりづらい、高度に研究者間のみで通用するような専門用語という意味かと考えるが、どこまでが専門用語かの判断は、各専門部会の中で判断することによろしいか。

【藤田委員長】専門用語といっても、これだけでは曖昧である。論文等で使う用語を指しているのだと考えるが、そこには説明をつけると。専門用語であっても、読んでわかるような書き方にする。専門用語を使わないでは書けない、当然だ。しかし、そのような処置をしていくことによろしいか。

【委員】その場合、説明をつける場合は「注」でつけるのか、あるいはその用語の後ろに括弧でつけるのか。

【事務局】つけ方も様々ある。巻末か、その節の末にまとめるのか、専門用語が出てきたときにつけるのがいいか、意見をお願いしたい。

【事務局】次の部分だが、同じ3 ページの真ん中の部分で、「数詞に「ケ」を使わないこととし、カタカナの小文字で「カ」を右に寄せて書く」、何か所とかといった場合に、「カ」を右に寄せて書くということで、前回提示したが、資料編から引用した場合に、疑問の場合の「カ」が出てきた場合に、そこの「カ」と、その「カ」の、小さい「カ」の使い方と混同する可能性があり得るのではないかと指摘があり、その可能性があるのであれば、何か所というような数詞の場合は、平仮名の「か」を使う方法を提案したい。

④の固有名詞、人名について、「人名の後に生没年を入れるときは、かっこ書の中に単位なしの西暦年号とし、縦書きにあっては漢数字、横書きの場合はアラビア数字とする」とされているが、前回、同じ1700、100年代までが同じだった場合、このアのように「一七二〇～八〇」と結ぶのか、ウのように「一七二〇～一七八〇」、1700は2度繰り返すのか、また、中つなぎは波線(～)にするのか、縦線(ー)にするのかというところが、結論が出ていなかった。

次の「原則として旧字体の人名はそのまま使い、ふりがなをふる」というところが、旧字体に限らず、読み方が不明な場合や二通りある場合にどうするか、振るのか、振らないのか、二通りあるものは左右に振るなどの例が考えられる。これも結論が出ていない。

4 ページ、ウのところ、年号と時代について、前回、基本的に鎌倉幕府や室町幕府というように所在地名を使って表現をすることとなった。前期以外の場合は慣用的な表現になっている場合は、該当する記述があるときは協議して決めていくと結論が出たので太字

書きにしている。

年号・世紀について、「明治維新以前は和暦をおもに使用し、単位なしの西暦をカッコで補う」ということで、例として享保元年（一七一六）、厳密には西暦と和暦が対応していないので、年は括弧の上に置くということで、これは決定事項である。

次の明治維新以降は、「西暦をおもに使用し、単位なしの和暦をカッコで補う」となっているが、既に資料編の中で、和暦を前に置いて明治三十三年（一九〇〇）という表記になっており、ここは再検討願いたい。

南北朝の時代については、「必要に応じて対応する別の年号を「南」・「北」を付して表す」となっているが、前回、基本的には付さないとし、中世部会において適宜判断をするということで、これは決定事項である。

続いて5ページ、資料の引用の部分、「長い文面の引用は本文から行替えし、二字下がりとして、末尾に典拠名か文書名をカッコ内に記入する」と、「引用文が資料編に掲載されている場合は資料番号も書く」と、例を記載しているが、前回、新八王子市史資料編からの引用は、記載方法を凡例で断るなどして、できるだけ簡略化をするとの意見が出ていたのでその通りにした。

前回会議の中で、結論が出ていない事項、後に齟齬が見つかった事項は、執筆要項の本文中では以上である。

次、数量と年号の部分は、先ほど説明したとおりである。

原始・古代部会で執筆中に、議論に上がった単語で、一例をあげると、「L 1 H、B 1、L 2、B 2 層」という単語がある。L 1 は1字の中に入れて、下にH層という書き方になっている。これは、L 1 H層が、L 1 という一つの層の固い部分、L 1 のSはL 1 のソフト層と、L 1 のハード層があるという地層の表記方法であり、その単語の意味から、L 1 に対してH、太字のL 1 H層、この表記が学術的には適当であるとの議論があった。

先ほど専門用語という部分で、専門用語はなるべく簡略化し説明をつけると説明をしたが、実際に表記をする段階で、どういった表記をしていくべきかというのを、議論している。

その中で、ある程度の部分は、基本的な執筆要項を決めつつ、各部会の事情によって決めていくことも考慮する必要があるのではないかと考えている。

あわせて、レイアウト案を配布した。これはまだ試作だが、判としてはA 5判であること、1行の字数掛ける行数などは、基本的なところは既に決定している。ただ、原始・古代部会の中で特に議論になったのは、限られたページ数の中で図や写真、図面をなるべく使用し、市民にわかりやすいものを作り上げていきたいが、いわゆる枠外の部分を有効に使用する、少しでも図や写真を大きくするために、枠外に写真や図が飛び出ることがいいのかどうかである。

1 枚目、資料編と同じ形で組んでいるものである。

2 枚目、写真を上余白部分、左余白部分にはみ出して置いている。そのため、柱をノン

ブルとそろえて下に移動させたもの。これが図や写真については余白スペースも有効に使った形の例である。

3枚目、写真を下にはみ出して置き、上にノズルと柱を移動させた。また、一例として、もし脚注等があった場合に、入れられるような形のレイアウトになっている。

以上、3パターンを示した。

このほか、他市町村では、断ち切りを採用しているものもあるが、横からページを見たときに、写真が断ち切られているページだけ、そのサイズでまちまちに黒い線が横や上に入ってくることになり、八王子のハードカバーの本だと、見栄えがよくないと考えられるので、今回は示していない。

また、ソフトカバーで2色やカラーを採用している市町村では、柱を両側の縦に配置しているものもあるが、八王子市のハードカバーには合わないと考えられるので、これも今回は示していない。

以上、説明が長くなったが、議論をお願いしたい。

【藤田委員長】1ページの二の「記述の全体に関わること」の①の最後の4番目、「やむを得ず専門用語を使う場合は、説明をつけるか理解できるような書き方にする」で、専門用語を使った場合の説明をどこにつけるか。専門用語の下に括弧でつける、あるいは脚注ということになるか。

【事務局】そうだ。ただ、脚注を多く使うことがないのであれば、余白が続くことになり、各部会で異なる部分もあるかと考えている。

【藤田委員長】各部会に任せるか、統一をしておくか。体裁にかかわることなので、統一するのが適当か。意見はあるか。

確かに脚注方式だと、脚注の注がないといつも下だけあき、かなり体裁が悪いように見える。専門用語で説明をつけるとしたら、括弧の中で書くか、本文にわかるように書くかのどちらかでどうか。各部会で統一することでよろしいか。

【委員】括弧内にする場合は、文字のポイントを落としてともいいのでは。

【藤田委員長】それでいい。

問題なのは3ページ目。要するに数と単位の表記の仕方で、傍線になっている部分。これは日数・年数の表記を、時間や数量と同様にするということ。特に世紀の表記は、アという方式とイという方式があり、資料編での表記がアという方式になっている。これは、近現代と近世と原始・古代でともにこうなるということか。

【事務局】原始・古代は横書きなので。

【藤田委員長】横書きはないのか。

【事務局】そうだ。近世、近現代ともに、資料編ではアの方式で記述している。

【藤田委員長】中世はどうか。

【委員】世紀は使っていない。

【藤田委員長】世紀はないのか。

【委員】世紀は、「二十一世紀」と、三つ数字がそろふものが該当するか。

【委員】既に21世紀に入っている。ゼロのほうがいいか。二十一と十が入るのは、ちょっとしつこい。資料編とどうしても同じにしなければいけないことはない。本編は「一一」や「一〇」でも、あるいは「二一」でもいいという考え方もある。

【藤田委員長】既に資料編でアという方式をとったが、21世紀はないので問題にならなかった。しかし、通史になると、近現代では21世紀は出てくる。そのときにどう表記するか、「二十一」は避けたいということ。近世では21世紀はない。ということは、近現代だけが問題か。しかし、本文中に何世紀という表記は出てくる。部会ごとにとというのは、不統一という印象を受ける。

なぜ、資料編はアの方式にしたのか。

【事務局】具体的に21世紀という表記は何カ所かあったが、余り大きな問題にならず、執筆者もそのまま使っていたが、その後、「十」で統一をした。「一〇」方式は、いわゆる数量で使い、年は和暦などについては「十」を使用することになっていたので、そのまま採用した。21世紀という表記だけだと考えられるが、このような経緯であったと記憶している。

【藤田委員長】どうするか。

【委員】21世紀は、そこまで数が出てこないのか。

【委員】21世紀を直接扱うことほぼない。ただ、21世紀を見通してとか、その流れの中で出てくるだろうが、頻発はしないと考えている。

【委員】資料編で使用したので、これでいくというのは。

【藤田委員長】では、アの方式を採用する。

(はい)

【藤田委員長】次に「数詞に「ケ」は使わないこととし、カタカナの小文字「カ」を右に寄せて書く」と。そうすると、疑問の場合の「カ」と混同する。平仮名の「か」とどちらが適当か。疑問の場合の「カ」は、右か左、括弧書きとかということになる。

【藤田委員長】普通は数か所とかという表現の場合には、片仮名の小さい「カ」を使うが、「ケ」は使わない。混同しないのでは。

【事務局】まず「ケ」の字を使わないことは決まっており、片仮名の小文字の「カ」は、資料内に、「何々カ」の「カ」で多く見られる。それと文章、混同するかどうかは別として、文章上で何か所と数、漢字で書けば「何箇」の「箇」になるが、それは平仮名にしたほうがいいということである。

【藤田委員長】数詞につけば使わないのは、これはいい。資料上は「ケ」と書くが、本文は「カ」と書く。

【委員】本文は平仮名の「か」を使い、資料は「ケ」でも「カ」でもいい。それをはっきりさせればよい。資料そのものを、「ケ」を「カ」に変えるのはまずい。そのまま平仮名で表現すれば、それで十分である。

【藤田委員長】資料上は、「ケ」であれば、これは変えることはできない。私は、平仮名の「か」が好きだが、どうか。

【委員】新聞はどうか。

【事務局】最近、平仮名の「か」が圧倒的に多い。片仮名の「カ」は、かなり少ない。やはり文章として見たときには、委員長も発言された平仮名の「か」で書かれる例が多いようだ。

【委員】1ページの執筆の方法のところの表記が、「原則として1ページ1か所は」と、平仮名になっている。

【藤田委員長】現在の趨勢を考え、平仮名の「か」にする。

次に、固有名詞の人名の生没年の表記の仕方である。ここにア、イ、ウ、エという4通り書かれているが、アカイがいいのではないか。要するに「一七」が繰り返されるので、これを取るのが普通行われている。つまりアカイである。

次は、波（～）にするか棒（一）にするかということである。かつては、多くは波（～）だった。いかにも「から」という感じである。最近、この棒（一）が多い。これは好みだから、どうするか。

【委員】私はアが好きである。

【藤田委員長】私もアが好きである。

【委員】これはゴシックであるので、普通の明朝体であれば、そこまで目立たないのではないか。

【事務局】そうだ。読めなくはない。縦のゴシックだと、すごく目立つところがあるが。

【藤田委員長】アでいいか。

（はい）

【藤田委員長】次に人名の振り仮名の問題である。「読み方が不明な場合や二通りある場合にどうするか。ふる、ふらない、二通りあるものを左右にふるなどの例がある」と。人名は、読み方がわからないのもあるか。

【藤田委員長】不明な場合は振らない、もうこれは当然だろう。

【委員】武者小路実篤、実際は「むしゃのこうじ」である。それを仮名で振るか振らないかで、論議がまた再燃する。そういうものは、歴史上の中で全部その中で出てくると、そこだけでいろいろ論議が出てくる。問題提起のもとになる。

【藤田委員長】いろんな本を読むと、間違っって振り仮名をつけているケースはよく見かける。

【委員】大久保長安（ちょうあん）が正しいか、「ながやす」が正しいか、これはわからない。そういう問題になる。

【藤田委員長】しかし、人名、読み方がわかっているので2通りある人もいる。近世だと、よく2通りで出てくるのは、秀忠の娘に、後水尾の中宮になった和子と書いた和の子。「かずこ」というのと「まさこ」と、2通りある。これは左右に両方書いている。そうやって

処理した。

【委員】二つに限られるとは限らないのだが、左右に振るというのもあっていいのか。

【藤田委員長】2通りあるものは、何とか2通り表記するということ。

【委員】近現代だと、本名と、地元の人がニックネームで何とかさんと呼んでいるのと違うときがある。地元では、いわゆるニックネームが定着しており、そこへ行くと、そういう名前で行くが、どうも本名は違うらしいということはよくある。

【委員】小田原などでは、二宮尊徳にするか、金次郎にするか、結構論争はある。

【藤田委員長】固有名詞でも、確かに通称が通りがいいと言う人も。実名が誰だかわからないと言われる人もいる。遠山金四郎が通り名。だけれども、それは通称である。

【委員】人名事典ではないので、一般の読み方なので、余り細かいところまで配慮をし過ぎて、かえって自分を苦しめるのでは。

【藤田委員長】その辺は、とにかく2通りあれば、どこかで表記することでよいか。

(はい)

【藤田委員長】さて、次は年号の部分である。明治維新以前は「明治維新後は西暦をおもに使用し、単位なしの和暦をかつこで補う」ということだったが、資料編は、年号・元号を出して、下に一九〇〇とか入れた。明治維新以後といっても、太陽暦を採用してからである。明治維新の年号を書くと。

【事務局】そうだ。

【藤田委員長】前近代はこういう書き方である。享保元年（一七一六）と表記する。

【事務局】はい。

【藤田委員長】これでいい。だから、近現代の問題である。どうするか。

【委員】「元号は使わないよ」と言う執筆者がいる可能性もある。「西暦でいくぞ」と。西暦が頭に来て、括弧して、やむを得ず元号を入れる、そういう執筆者がいるかもしれないが、これは余りばらばらだと、よろしくないか。だが、明治になってから西暦が頭に来るのもどうか。

ほかの市史ではどうか。

【事務局】幾つか調査した。やはり統一をしている例が多い。むしろ統一していないのが見つからなかった。元号が先に来る前近代の記述の仕方と同じ。元号、年、括弧して西暦を示すのが多い。ほかの形式は通史編では見つからなかった。

【委員】自分の論文なら、自分の主張でやればいいが。

【委員】一般的な感覚は、和暦が最初に来て、括弧書きで西暦である。西暦を先に持つてくるのは、革新系の思想がそこに入ったから。それに転換された部分が相当ある。ただ、ここでは考え方をちゃんとはっきりして、明治以降は、要するに国際化の中の日本だと、そういう捉え方を明確にして、西暦を前に持つていくとしておけばいいのではないか。八王子市の新市史は、その表記でいいのだと。ただ、資料編との齟齬はあるが。

【事務局】新井副委員長の発言のとおり。資料編と通史編の前近代が、元号が先に来る。



近現代に関する通史2冊だけが西暦が頭に来て若干違和感がある。ただ、読み手のことを考えると、やはり元号が先に来たほうが、ぴんとくる方が多いのではないか。

【委員】だから、ここは新しく書くべきである。

【事務局】はい。

【委員】例えば、昭和30年代の高度経済期、その表現の中で、1955年代は、50年代というのがいきなりぼんと入れば、昭和と西暦がぴんとこない。

【事務局】そうだ。

【委員】それは、読み手の問題もある。どうも混同しやすい。普通考えている場合、昭和30年代の高度期、それが定着している。ところが、人によっては、それは1950年代だと言う人もいる。

【委員】私の担当分野はまざっている。例えば55年体制という言葉が定着しているが、あれは1955年で、あと80年代が地方の時代という場合は1980年代だが、ただ、一方では、昭和何年代と言ったほうがわかりやすい場合はそれを使い、一つの論議でまざることがある。非常にやりづらい。

【藤田委員長】そのとおり。結局、近現代の問題で、近現代部会でいいように決めてもらえれば。しかし、中は統一していただきたい。

【委員】近現代で委員の意見を聞いた上で。

【委員】読む年代層によっても違う。

【委員】そうだ。

【委員】我々の年代層と、今は全然違う。

【藤田委員長】中世の南北朝の件はこれでいい。

次に5ページの「資料の引用のしかた」である。これは資料編に掲載されている場合は、こういう書き方をするということか。

【事務局】前回の資料編の引用をするときの表記が、少ししつこかった。凡例などに書いて、簡略化して、資料編からは引用していくと意見があったため、それを明記した。

【藤田委員長】だから、例でやるわけか。

【事務局】はい。

【藤田委員長】引用等、出典は前近代にぜひお願いしたい。何に基づいて書いているのかわからない。例えば「千人同心史」の通史編は、書いていない。何に影響されたのか。よろしくない。資料を長く引用したから、それにはつけるのだという、そういうことではなく、何か資料に依拠して書いた場合は、その資料を出典としてつけることが必要だ。煩わしいようには見えるけれど。

【委員】定本になるわけだから、やはり資料は明確にする。

【藤田委員長】明確にすることが必要だ。

【委員】これ以上略しようがないか。資料編は資だけにするか、通史編は通だけにするか、これはやらないか。

【事務局】あとはそういうところが。

【委員】資料編近世Ⅰの三二九、これは。

【事務局】この近世ⅠのⅠは、恐らくアラビア数字である。申し訳ない。

【委員】資料編というのを取るくらいか。

【事務局】はい。

【委員】凡例に書いてあるなら。

【事務局】凡例でうたって取る方法もある。

【委員】今は、資料編を削るぐらいである。

【事務局】凡例で、新八王子市史の資料編は、省略をして書いてあることを明記すれば、資料編を取り、近世<sup>1</sup>・三二九と書いてあるものは、新八王子市史の資料編だと。ほかから引用した場合は、ここまでの省略はできないので、逆にそこまで省略しなくても。市民にも、凡例に入れておけば通じやすい。より短くということがあれば、また検討する。

【藤田委員長】執筆要項自体は、概ね終わり。

さて、レイアウトの問題である。例は自然編のページだが、参考資料Bである。3通りのレイアウトが提示されている。これは原始・古代、近世、中世、近代、全てかかわるので、意見を。

要するに、オーソドックスなのは、恐らく1枚目のもの。2枚目が、上に飛び出すというものか。

【事務局】そうだ。これは上と左に余白を利用して少し飛び出しているものである。

【藤田委員長】飛び出している。

【事務局】はい。

【藤田委員長】3枚目は、それを下に持っていった例か。

【事務局】はい。

【藤田委員長】あと脚注をつけると。

【委員】これは実際に編集をやったときに考えることだが、やはりできるだけ写真は大きくしたいという希望が多い。1枚目だと、形がもう大体決まっている。もう少し大きくという場合は、ちょっとはみ出ることが編集のときに一部から要望がある。委員長の発言のとおり、1枚目が一番オーソドックスだが、写真の大きさも大体固まってしまう。多少、上と左で少しはみ出せば、写真がもう少し使える可能性がある。

【事務局】新井副委員長の指摘のとおり、原始・古代部会では、事務局の見本が飛び出しの見本だけで、サイズを変えないまま外に飛び出させているので、わかりづらいが、1枚目の同じ位置のまま、より大きくできる。原始・古代部会では、全てに断ち切りではないが、余白も使えれば、図表や写真を入れて、たくさん提示したいものが多いという議論になっている。

原始・古代部会での議論等、補足があれば。

【委員】特に資料編でも重点を図表や写真に置き、限られた範囲で大きく使いたいという

意向はある。

【藤田委員長】やはり大きく載せたいということはある。そのほうがわかりやすい。ただ、大きくするのを、飛び出してやるのか、この1枚目のように、ページ内で大きくすることもある。いつも飛び出しがないと、上があいている印象を持つ。何か余白が一部にある体裁にならないか。

【委員】一般的に、グラフィティなものは断ち切りでできない。だから、アカデミックで、ある程度重みのあるものを基調にした場合は、余り断ち切りを中に入れると、何となく感覚が違う。柱も、やはり統一しておかないとまずい。活字も明朝か何かにすると。

【事務局】はい。

【委員】ゴシックだったら、これは断ち切りでもいい。やはり定本、「新八王子市史」だから、それなりの体裁と重みを持たせないとだめだ。

【藤田委員長】1枚目で、写真、図版の部分、これを大きくすることで処理できるのでは。

【委員】場合によっては、半分半分で。

【藤田委員長】いいと思うが、それは図版の形状にもよる。細長いものなら、仕方がないが。中世はどうか。

【委員】構わない。

【藤田委員長】1枚目のこの方式でお願いしたい。

議題の1、残りはないか。

【事務局】はい。

### 3. 平成25・26年度刊行予定について

【藤田委員長】議題の2に移る。

【事務局】市史編集委員会資料の2番を参照してもらいたい。25年度・26年度の刊行予定を掲載している。

25年度は鋭意努力して進めているが、6冊ある。「自然編」、あと資料編は、「中世」と「近現代2」だ。本編資料編と言われているのが3冊と、民俗の「織物の技と生業」と、「検地帳集成」で市史叢書2冊、あと「八王子市史研究第4号」で、合計6冊刊行予定となっている。年度末まで鋭意努力して、全て刊行できるよう事務を進めている。

26年度は、6冊刊行予定となっている。通史編は「原始・古代」と、あと資料編の「近世」と2冊、800ページと、1,000ページを予定している。それ以外は、近現代部会の「統計調査報告書」と、民俗部会の「浅川の民俗」が年度の上半期に、年度末に「加住の民俗」と2冊出す予定になっている。「八王子市史研究第5号」を出すのだが、市史研究は26年度で一時停止となる。

【藤田委員長】しかし、大変な数だ。これを円滑に出版していくのに、お互いに大変努力しているが、よろしくお願いしたい。

何か意見は。

【委員】刊行の予定表で逐一説明があったが、平成22年・23年、刊行予定の変更をしている。その変更に基づいているということか。

【事務局】変更後のスケジュールどおりである。

【委員】編さん審議会はしばらく開催されていない。私は編さん審議会の一員としてここに出ているわけなのだが、「平成25・26年度刊行物予定」については、本来、市史編さん審議会に提示し概要説明を行うものである。編さん審議会に変更後の状況について報告がほしい。

【事務局】編さん審議会を開催するようにする。

【委員】順調に刊行が進んでいるという報告を編さん審議会の中で明確にしてもらいたい。

【事務局】はい。

【事務局】今年度中に開催し報告をする。

【藤田委員長】ほかに何かあるか。

(なし)

#### 4. 『八王子市史研究』第5号について

【藤田委員長】3番目が「八王子市史研究第5号」についてである。

【事務局】市史編集委員会資料3番、A4の縦1枚を参照してもらいたい。来年度の市史研究第5号の概要について、A5判縦書き、2,000部、発行日、平成27年(26年度末)予定にしている。

議論をお願いしたいのが6番の編集体制で、市史研究の編集会議、藤田委員長と委員2名で、創刊号から第4号まで、記載のとおりであるが、来年度(26年度)の市史研究5号の編集体制を決定したい。基本的に、26年度に大きい刊行物がない部会の委員にお願いしたいが、順番だと、新井副委員長、池上委員、畔上委員から二名かと考えているかどうか。

【委員】どの中で私の名前が。

【事務局】新井副委員長、近現代、ここを出して、新井副委員長、あと中世部会の池上委員、自然部会の畔上委員から、二名が妥当かと考えている。

【委員長】新井副委員長は、少し遠のいている。

【委員】本年に比べると来年度は。

【藤田委員長】新井副委員長にお願いする。さて、問題は畔上委員と池上委員。では、池上委員にお願いしたい。

【事務局】よろしくお願ひする。

【藤田委員長】編集の体制はこれで決定。あとは従来どおりの体制で。

【事務局】はい。

平成26年の5月末ごろに第1回の市史研究の編集の打ち合わせを、あと市民投稿等も募集し、10月末に第2回の編集会議を開く。藤田委員長、新井副委員長、池上委員、こ

の3名と事務局で市史研究の編集を進める。

裏面に移り、第5号の投稿論文の募集で、募集の記事も第4号の巻末に掲載する。7月末申込期限、あと原稿提出の期限を9月19日にしたい。

【藤田委員長】これは投稿論文の件か。

【事務局】はい。

【藤田委員長】4号は結局1件だったか。

【事務局】3本投稿があり、1本掲載した。

【藤田委員長】そういう経緯だったか。

【事務局】はい。近世の内容で1本掲載する。

【藤田委員長】何か市史研究についてあるか。

(なし)

【藤田委員長】第5号で停止するという事か。

【事務局】一旦停止となる。

【藤田委員長】わかった。

## 5. その他

【藤田委員長】その他、何かあるか。

【事務局】今年度、市史編さんの市民講座を企画しており、今年度は自然部会で、「八王子の自然を学ぶ」という題で、2月7日と14日と21日の3回開催する。自然部会の奥田委員と岡崎委員、須田委員の3名に講師をお願いしている。

あと、12月に、藤田委員長、新井副委員長、服部専門調査員が学習支援課主催講座であるが、「新八王子市史を読み解く」という題で、人数も多く集まり盛況のうちに終了した。

続いて、2月16日に、毎年恒例の自然部会と八王子市・日野カワセミ会共催の「浅川の野鳥観察会」を実施する予定である。

【藤田委員長】用意された議題は全部終了した。

## 6. 閉会

【藤田委員長】編集委員会、これで終了する。

平成 26 年 3 月 28 日

会議録署名人 池上裕子